

第 1 回佐倉市地域福祉計画推進委員会 議事録

開催日時	平成30年5月31日（木）午後2時00分～4時00分
開催場所	佐倉市役所1号館6階大会議室
出席者	石原 茂樹委員、宇田川 光三委員、内川 浩明委員、大久保 和夫委員、小原 和夫委員、川根 紀夫委員、小林 眞智子委員、深沢 孝志委員
欠席者	西廣 直子委員
事務局	佐藤幸恵（福祉部長）、三須裕文（社会福祉課長）、林田成広（社会福祉課管理班長）、舎人樹央（社会福祉課地域福祉班長）、福山聡昭（社会福祉課主査補）、山本あずさ（社会福祉課主査補）、杉山拓巳（社会福祉課主任主事）
議 題	<ol style="list-style-type: none"> 1. 委嘱状交付 2. 福祉部長あいさつ 3. 議事 <ol style="list-style-type: none"> （1）会長、副会長選出 （2）会議公開、議事録の作成方法について 4. 概要説明 <ol style="list-style-type: none"> （1）佐倉市地域福祉計画推進委員会について （2）「第3次佐倉市地域福祉計画 中間報告」について （3）今後のスケジュール（予定）等について 5. フリートーク
配布資料	<p>資料1 佐倉市地域福祉計画推進委員会設置要綱</p> <p>資料2 佐倉市地域福祉計画推進委員会委員名簿</p> <p>資料3 「第3次佐倉市地域福祉計画 中間報告」</p> <p>資料4 こうほう佐倉掲載記事一覧</p> <p>資料5 平成30・31年度スケジュール（予定）</p> <p>資料6 第4次佐倉市地域福祉計画 策定に向けた体制について</p> <p>資料7 法改正の動き（国資料抜粋）</p> <p>資料7別冊 「地域共生社会の実現に向けた地域福祉の推進について（市町村地域福祉計画の策定ガイドラインを含む・国通知）」</p>
傍聴人	なし

〔 顛 末 〕

1. 開 会

2. 委嘱状交付

3. 福祉部長あいさつ

4. 議事

（1）会長、副会長選出

会長に、小林 眞智子委員、副会長に、内川 浩明委員が選出された。

(2) 会議公開、議事録の作成方法について

会議の公開の可否について、佐倉市情報公開条例に基づく佐倉市地域福祉計画推進委員会設置要綱第7条の規定により公開することとする。ただし、特定の個人又は法人の情報に関して公開しないことが適当と認める場合は、公開しない。

また、議事録の作成方法は、発言の要録とし、議事録は、佐倉市市政資料室に配架し、必要に応じ佐倉市HP等で公開していくこと及び会長と委員1名が名簿の順に輪番で、議事録確認をすることが了承された。そして、今回は会長と川根委員が議事録確認者であることが確認された。

5. 概要説明

(1) 佐倉市地域福祉計画推進委員会について

(2) 「第3次佐倉市地域福祉計画 中間報告」について

(3) 今後のスケジュール（予定）等について

【資料1】から【資料7別冊】に基づいて、事務局から一括して説明を行った。

○意見、質疑等

【会長】

ただいま、事務局から、地域福祉計画推進委員会について、「第3次佐倉市地域福祉計画 中間報告」、また、30・31年度のスケジュール等について説明がありました。

この委員会の役割としましては、第3次佐倉市地域福祉計画の進行管理及び評価をしつつ、来年度末までに「第4次佐倉市地域福祉計画」の策定に関する提言を行うこととなります。

限られた会議の中ではございますが、ご協力をお願いいたします。

ただいまの説明に対して、ご意見、ご質問などございますか。

【委員】

この中間報告をまとめるときにも、評価をどうするかという点について、現段階では、住民の参加を促進するために、住民の意識を高揚させるかたちによって、住民の参加が増えてくるであろうということだったと思う。

中間報告では住民の参加について、2つあり、行事を行う側と、行われた行事に参加する側の2つの意味がある。評価のやり方、課題などについては、もう少し検討する必要があるとしている。

今回の資料7別冊の41ページの一番下に、評価のやり方についての考え方が出ている。○の3行目、「地域住民や関係機関の意識や行動にどれほどの変化を与えたのか、地域にどれほどの変化を与えたのか、連携がどれほどまでに動くようになったのか等、直接的な成果として得られてきたものやその広がり（影響）にも着目し、そこ

を伸ばしていくという視点も重要である」と書いてある。

実はこのことがとても大事ではないかと思っている。住民の意識は、中間報告のデータを見ると、思うとどちらかというと思う、の割合が、80%を超えるもので、非常に高い。しかし、それが現段階では、実際の参加というかたちについて、どれほどの影響を及ぼしているのか、評価が欠落している部分があるのではないか。

今後、第4次計画に向けて検討するうえでは、この部分について、積極的に検討すべきであるという考えを持っている。例えば、事例を広報で出した場合、どの程度見てもらえたのかどうなのか。何人かに聞いたが、広報に着目していた人は、残念ながらまだいない。

また、各団体や行事などにおける参加の実態はどのようなのだろうかということも、気になる。そのあたりに焦点をあてていかないと、本来の目的である、住民の参加の促進という、この計画のもっとも基本的な部分が曖昧なかたちになってしまうのではないかなという気がする。簡単なことではないと思うが、今後の計画の中で、少しずつ具体化できていくようなかたちだと大変ありがたいと思っている。

【事務局】

ご意見ありがとうございます。どういった広がりを見せていくかという視点を持っていくということは大事だと思っている。今いただいたご意見を踏まえながら、今後の作成の検討にさせていただければと思います。

【会長】

実際に、事例を取材してもらってから、時間が経っているので、たぶん、いろいろな意味で変わっているところ、広がりを見せているところもあるかと思うので、今後、それについてはアンケートになるかと思うが、実態を把握するということがだったので、よろしくお願いします。そのほか、ご意見、ご質問などはありますでしょうか。

【委員】

次期計画との関係で、教えてもらいたいが、これまでは、「地域福祉に関する活動への住民の参加の促進」に焦点を絞っていた。しかし、今度、法改正があり、新たに、記載しなければならない事項が加わり、資料3の中間報告の48ページにその関係が出ているが、今の時点で、事務局としてイメージがあれば、聴かせてもらえるとありがたい。

【事務局】

示していただいた、資料3の中間報告の48ページの図、第3次計画では、青の網掛けをしている、「住民の参加の促進」というところに、焦点を絞っていった。そのあと、黄色になっている、社会福祉法の改正が入ってきた。この共通して取り組むべき事項を、どうやって次期計画に記載するべきかが、検討課題になってくると思う。

今の事務局のイメージとしては、第2次計画で、様々な福祉の政策、個別計画と重複が多かった部分、この部分を整理して、第3次計画になってきたという経緯がある。そこで、「住民の参加の促進」に焦点をあてていくという方向性は、第4次計画においても、継続していきたいと思っている。

中間報告の、7(3)計画の性格と方向性について、にも書いてあるように、地域共生社会の実現においては、住民同士の支え合い助け合いが重要であるという考え方、これが1つの柱であると考えているので、第3次計画の柱の部分については、これを継続していくようなイメージでおり、基本的には、第3次計画とこの中間報告でいただいた方向性を活かすということで、進めていきたいと考えている。

【会長】

そのほか、ございますか。

【委員】

資料5や6を含めて、随所に出てくるが、福祉課題、高齢者の課題や障害者の課題にしても、1部門だけで検討していても、埒が明かない。そういう意味で、全庁的な検討会を設置するというのは、いろいろな部分で言えることだが、特にこの地域福祉計画で、全庁的な取組を推進するということについて、真剣にやってもらいたい。

特に、今、考えている、全庁的な検討会のメンバーに、そういうものに対して、きちんと答えられるメンバーを選んでもらいたい。有効な会議にしてもらいたい。

【事務局】

ありがとうございます。確かに、今、地域福祉計画に限らず、高齢者も障害も子育てもそうだが、ありとあらゆる分野で、全庁的な会議体や共通認識を持った中で進めていかないと、事業そのものが進んでいかないという実態があるので、全庁的な情報連携を踏まえながら、進めていくということで、事務局も考えている。

【会長】

今、委員がおっしゃったが、孤立している方の事例に携わってみると、いろいろな分野で重なっている。高齢者だけではなくて、障害があつたり、家庭の問題であつたりして、全庁的に見るということは大事だと思うので、よろしくお願ひしたいと思う。

そのほか、ご意見、ご質問はございますか。もし、ないようでしたら、会議次第に従い、進めさせていただきます。

6. フリートーク

【会長】

続きまして、次第6 フリートークに入ります。今回、このメンバーで集まる初めての推進委員会になることから、地域福祉やこれからの地域づくりについて、それぞれ

れ日頃いろいろな活動をされていると思うが、その活動の中で感じていることを中心に、フリートークを行いたいと思います。私たちもそれを参考にさせてもらいたいと思います。私の方から、順番にご発言を求めますが、地域福祉に関することでも、感じていることや思い、日常活動についてなど、何でも結構なので、お話をいただければと思います。

【委員】

地域福祉と言っても、核家族化政策が進んできて、人間関係が希薄になってきた面がある中、今、それが転換されようとしている。中間報告のデータにもあったように、実際の行動に結びつくというのはとても難しい。そういう時代に、地域の人たちと頑張ってきたのが、今、地域福祉をやっている人たち。一方で、社会に貢献するとか、人助けに関わるといったことができにくい世代の層が、75歳になろうとしている。

この団塊の世代の子どもたちの世代に、どうやって地域福祉に参加してもらおうかを考えると大変だなというのが、率直な印象。

しかし、かなりの数の人たちが、地域福祉に参加していて、社協の福祉委員は1,300人いる。ただ、1,300人で、佐倉市の全世帯を見ていくと考えると、決して大きな数ではない。また、どんどん生産年齢人口が減って、介護人材がいなくなってしまうかもしれない。働き手が少なくなっている中で、地域づくりをどうやって進めていくか、新たな視点が必要ではないかと思っている。

【委員】

関連するかもしれないが、中間報告49ページの、第4次計画に向けてのところで、計画の成果を求めるにあたって、第3次計画だと、市民の活動の状況などを紹介して、あるいは、地域福祉の必要性を伝えていくという手法だったと思うが、その先、実際にどういう風に参加できるのか、佐倉市にはどんな参加の方法があるのか、地区社協などはい例だと思うが、いわゆる出口、住民の参加を促進するためには、こういう手法があるというところまで、第4次計画ではちょっと踏み込んでいく必要があるのではないのかなと思う。

このあたりの連動は、社協、また、社協の地域福祉活動計画との連動になってくると思うが、今、活動計画は、市社協と14の地区社協、いわゆる住民の直接的な活動計画で、まさにそこが、1つの気持ちを高揚させて、促進していくための出口になると思う。うまく市の計画と地区社協の活動と連動しながら、意識を高めていった先に、佐倉ではこういうメニューがある、そういうところまで踏み込んだ計画にしていけると、いいような気がする。そうしていかないと、直接的な成果が得られているのかどうかという指標も、やりづらくなるのかなという気がする。

地区社協、1,300人の福祉委員がいるが、やろうと思えば、もっと福祉委員が必要。地域の方で見守っていくかとなると、1,300人では少ない。地区社協という、佐倉では他市よりも進んだ、実績のある、ボランティア団体が全市域にある。そ

れを1つの出口にし、意識していただきながら、住民の参加を促進していく。そういう連携をしていきたいという気がする。

【委員】

フリートークの前に、資料3について、2点ほど気付いた点がある。

10ページのところの、高齢者福祉課のところだが、事業の概要等で、ホームページのアドレスが書いてあって、開いてみたが、一番目が生活支援体制整備事業とは、二番目が、生活支援コーディネーターとは、三番目が市内の生活支援等サービス、四番目が生活支援等サービスの重層的な提供イメージ（厚生労働省 資料より）の段落に分けてある。

事業の概要等に照らし合わせて見ると、何をここで見たらよかったのかなというのがよく分からない。もう少し親切にしてもらったらいいのかなという風に思った。

また、今後の課題がこの部分ではない。13ページのところの、障害福祉課のところも、今後の取組というのがない。1つの取組があって、今後の課題や取り組みについてという記述があったほうが、読むほうとしては安心すると思う。

2点目は、15ページの成果指標はあるかという点。22ページのほうに、しっかりした最終的な成果指標が出ているので、それでいいのではないかということ。以上が気付いた点。

次に、佐倉に40何年住んでいるが、住みやすい、住みよくなったのか、住みよい街、地域なのかとふっと考えた。厚労省で、我が事丸ごとというのがあって、我が事というのは、他人事になりがちな地域づくりを地域住民が我が事として主体的に取り組んでいただく仕組みを作っていく。先ほど、地区社協のボランティア活動の話もあったが、年々やはり高齢化している。敬老の集いに出ているが、実は招待者側に入る人が切り盛りをしている。その年齢層の中の元気な人が、とりあえずやる。

そうなってくると、今までの考え方というのは、通じなくなってくる。それなりの年齢層に合わせて、元気な高齢者が困っている人を助けるというのもいいが、限界がある。福祉やボランティアは敷居が高いのか、若い人たちが入りにくい。将来、自分たちもそういうかたちで面倒を見てもらう、そういう認識がない。こういう気付きが、何かの中でできれば。1つ、2月に開催された地域福祉フォーラムで、中学生にプレゼンをやってもらった。ボランティア活動をして楽しかった、よかった。これが1つのほのかな光かなと。こういう輪を開いた人たちをがっかりさせないようなかたちにしていけないといけないと思った。

独居の人が外に出ないのは、出たくないのか、出るきっかけがないからなのか、分からない。人間関係、コミュニケーションを取りながら、情報交換をして、この人はこういうことに困っているのだなというのが生きがいになっていくのかなと。

こういうようなかたちを、計画や佐倉市でやっているぞというPRができれば。こんなことを佐倉市でもやりだして、計画に則って、実際にやってみたら、こういういいことが出ましたよ、というようなことを、みんなに知ってもらえることができればいい

いのかなと思っている。

【委員】

都道府県幸福度ランキングというのがある。幸福度に集約されるのではないか。地域の支え合いというが、みんなが幸せだなと思うことが、一番大事なことだなと思う。

高齢者の福祉というかたちに対しては、偏見ではあるが、手厚い介護、お金が有り余っているという考え方が延々と続いているのではないか。

どうしても、支えなければならない人、障害者を含めて、それは手厚く介護するべきであろう。しかしながら、本来ならば、元気であっていい人たちが、どんどん年とともに、衰えていく。この現実を見ると、こういう人たちに対して、もう少し別の角度の捉え方、別の考え方を行政の中に入れてもらわないと、どんなに頑張っても財政的にやっていける状態ではなくなることは目に見えているのではないか。そういう視点で、高齢者施策を考えていく、健康長寿ということを。

地域福祉計画なので、もっと具体的かと思っていたら、非常に焦点が絞られている。総合計画も個別計画も全て見させてもらった。非常によくできていると思うが、何が目玉なのかよく分からなくなってくる。社会では、目玉がはっきりしていないと、物事が伝わらない。情報発信力が強くなければ、伝わっていかないし、見方、考え方や知恵を寄せ合って、やることはできないのかなと考えている。

【委員】

よく使う言葉で、「普段できないことは、災害時でもできない、普段からの人の繋がりが、災害時の助け合いに通じる」、こういう言葉をよく使う。例えば、今、困った課題を抱えていなくても、いずれは困った課題が出てくる。これは誰でも通る。今、佐倉市でも介護保険を利用している人が、5, 800人ぐらいいる。いずれはなる可能性が十分ある。そうなる前に、また、なったときに、1人の困った課題をみんなで助け合い、みんなの課題にして、みんなで助け合う。これは、理念。こういう考え方に照らせば、地域の支え合い助け合いは必要となる。

そのために、具体的にどうしたらいいか、いろいろあるが、例えば、どこの町会や自治会でも、お祭りとか、餅つき大会など、いろいろな行事をやるが、それを一過性で終わらせている。1年に1回だけやる。多くの人が集まる、多くの人を楽しむものを普段の繋がりにもって行って、いざというときのコミュニケーションが取れるような、地域にしていく。そういうことをいろいろ考え始めてから、防災訓練をやっていたら、いろいろな人が集まるが、終わってから、総括的なことを総会に出していなかった。それを、広報紙を作ることで、防災訓練の役員として参加していなかった人でも、こういう繋がりというのは大事なかなということに気がつき始めていて、普段できないことは、災害時でもできないというところに繋げていく。

我々のほうも、そういう人をターゲットにして、いろいろな行事に参加してもらい、気が向いたときに参加してもらい。いろいろな意味で、少し前向きに取り組むように

なってきた。まだまだだが、そういう思いでやっていることが、こういう地域福祉計画にも活かせればという風に思っている。

今、高齢化時代で、団塊の世代も、7年後ぐらいには、全員が75歳以上になってしまう。そういう時代になってきたので、介護保険を利用する人は、利用をする仕組みを。元気な高齢者が、困った課題を持った高齢者を支える。高齢化をマイナス思考で考えないで、福祉の面も、高齢者は弱い立場ではなく、今は、敬老会でもほかでも、高齢者が高齢者をお祝いしている。そういう視点は改める必要があると個人的には考えている。

元気な高齢者が困った課題を持った高齢者を支える時代になった。90歳、100歳が珍しい時代ではなくなり、しかも、元気。高齢者が誰でもできる社会貢献は、元気で健康でいること。病気を1つ2つ持っていたても、元気でいようという意欲とそのため健康でいることが、日本の、地域の体制上も含めて、マイナス思考ではなく、プラス思考となる。

地域で防犯パトロールをやっているが、元気で健康な社会貢献をするなら、一歩進めて、誰でもできるボランティア活動の1つが、防犯パトロールだと思うので、それを大いに進めたい。そこから、次のステップに進んでいくことも可能。そういう意味で、元気な高齢者でいる間は、みんなと一緒に、地域の支え合いに少しでも役立てるようなことをしていきたい。地域福祉計画の中にも、そういう視点をより取り入れていけば、いいのかなという風に思っている。

【委員】

みなさんの話を聴いて考えたが、地域って何かなど。地域というと、普通、自分の住んでいる地域を言うことになるが、今の地域は、どうなのかなと考えると、高齢者が作っている。それ以外の人というと、働いていて、子どもを育てている方の地域というのを考える。

これは地域の問題だけではなくて、やはりボランティアで活躍なさっている団体はというと、高齢。若い人はいない。たまに50代ぐらいの人がいると若いねというところになる。

一方、そういうボランティアの人は、どういうボランティアが多いかということ、昔、40年ぐらい前の、ボランティアが始まったぐらいの頃、障害、福祉の部分のボランティアだった。今のボランティア活動を見ていると、確かにそういうところにも目を向けていただいているが、実態はというと、趣味の部分がメインになってきているボランティア団体から入る。そこはそれだけではなくて、少しずつ、福祉の部分にも目を向けてもらう。

また、ボランティアを受け入れる側の、障害者のほうも全く同じ。年々、障害者の団体が、なくなるところがある。佐倉市でもなくなっているところがある。若い人たちがいない。この若い人たちは、違うコミュニティ。このあたりをどうやって、1つにしていくのかということところが、ちょっと描けていない。

その中で、1つ私が希望を持っているのは、20年以上前、社会福祉協議会で、障害者と一緒に、高校生のワークキャンプをやった。そのメンバー、今、40代で、年に1回集まってもらって、近況報告をしているが、その人たちはほとんどボランティアに残っている。今、活動はできない人もいるが、中には地域に入られて、町内会の役員をやったり、子供会の役員をやったり、いろいろなことをされている。そういう部分は、接着剤、1つのツールではないかなど。確かに、今いる高齢者の地域をどうするかというのも必要だが、その2つぐらい下の段階、子どもたちにそういう意識、コミュニティ、地域で、地域に、というのは、絶対、置いていってはいけないところと思っている。

地域も難しくなっていて、外国人、日本語が通じない地域、コミュニティがある。国の政策で、障害者は施設から地域へという流れがあったりする。そういう部分で、今の福祉委員さん、民生委員さんたちが、どこまで把握されているのか。1,300人の福祉委員さんがいれば、1つの問題をみんなで解決していこうとすれば、すごい力が出るはず。ただ、今、本当に分散している。やらなければならないことが多すぎるので、1つに力が集中できない。どこかで、こういう問題というのは、力を集中して、変えていく土台を作らなければならない時期と感じている。

【委員】

一番感じているのは、やはり、みなさんもそうだと思うが、変革の時期。特にこの数年間で、絶対的に、社会全体が変わったのかなど。国もやっと分かってきて、遅いという感じ。少子高齢化も、人口問題研究所がある。最近、2040年になったら、社会保障費190兆円になるとの推計が公表されたが、あと20年しかない。

地域でも参加する人の意識の違いがあり、今の人を見ていると、スマホ。これから自動運転、スマホでお風呂が沸かせる時代になる。すぐそこまで来ていて、考え方とか、教育の違いから、今のボランティアをやっていた高年齢の方がいなくなったときに、次どうするのだと。例えば、施設で言うと、ボランティアの人が若干減っている。健康問題とか、年齢のこととかいろいろな条件で、減少していると思うが、その次の人にどう参加してもらうか。

実際に、地域ケア会議に出ていると、いろいろな意見、いい意見を持っている人もいる。いい意見をできることからやっていって、広げていくしかないのかなど。障害でも、高齢でも、児童でも、本当は一体的にできればいいが、できる部分から、できることをやっていき、それを広げていく。急に変わるのには、手段がないというか、方法が思いつかない。急に時代が変わったのは確か。国の通知などを見ると、やるほうは大変な内容と痛切に感じている。

社会福祉法人も厳しく、介護保険の点数などを見ていくと、ついてこれないところが出てくる。今、全国的に問題になっているのは、介護職員が全くいない。もう1つは調理員がいない。調理を委託で出しているが、なぜかという、本当は直営でやったほうがコストは安い、今は、調理員が確保できないため。佐倉市では比較的直

営でやっているところが多いが、どちらかというところ、直営は厳しくなる。職員の教育、人材育成もあるし、もちろん、地域のこともやっていかなくてはならない。だんだん大変になってきているというのが現状。

【会長】

民生委員・児童委員の枠で来ているので、民生委員のことを話させてもらおうと、民生委員は昨年100周年ということで、日本独自の制度で、長い歴史があるが、全国で約23万人、佐倉市では203名の民生委員が8地区の民児協に分かれて、それぞれ地区の実情にあった、毎月の定例会を開いて、行政と連携しながらやっているが、みな問題になっているのは、民生委員の成り手の問題が出てきている。佐倉市も現在203名いるが、定員は215名。一斉改選のときから1年半が経つが、欠員のままのところもある。来年には一斉改選が始まる。何とか欠員を出さないで、民生委員を全部集められるように、少しずつ考えているところ。民生委員は各地区から推薦を受けるわけだが、自治会のないところもある。そういったところをどうやって選出していくか。また、ずっと同じ区割りで来ているが、これでいいのかというの、考えていかなければならないと思っている。

私の地区は、造成から40年以上経つので、本当に高齢化が顕著な団地。幸いに、老人クラブがあり、70名ほどいるが、結構みんな元気に、防犯組織の担い手で活躍してくれたり、自主防災組織にもたくさん入ってくれている。餅つきなどは若い人には負けていない。元気な高齢者が地域の中で、役割を持っていくことは大事なことかなと思っている。

ただ、1人暮らしの高齢者、出掛けられないとか、出づらい方もいる。地域では居場所づくりを一所懸命にやっている。お年寄りが日中集まるとか、ふれあい居酒屋だったりとか、ふれあい・いきいきサロン「なごみの会」、居場所を作っていれば。自分の団地でやっていけば、歩いて行ける。何とか介護予防を使わなくても、何とか元気でいられるように。

子どももいろいろ貧困とか、母子世帯だったりとか、たくさんいる。民生委員はどうしても高齢者に頭が行きがちだが、児童委員も70周年ということで、主任児童委員と力を合わせて、子どものことに力を入れていこうということで、地域福祉計画にも取り上げてもらったが、小学校に行って、挨拶運動をして、顔の見える関係を作ろうということと、今、貧困ということが叫ばれているが、母子世帯ばかりではなくて、父子世帯とか、おばあちゃんが子育てをしているという世帯もあるので、居場所づくりと学習支援を一緒にしたようなねこの会を始めた。子どもたちが随分と増えた。子どもは、18時ぐらいになると、とってもお腹が空く。毎週金曜日に学習支援をやっていて、毎週は厳しいが、月1回、4月から、最終金曜日にこども食堂の活動を始めた。

こういうのをやるときに、広がりということで、民生委員だけではできないので、学習支援に関しても、地域の学校の先生だった方とか、ピンポイントでお願いすると、

結構やってくれた。ねっこ食堂（こども食堂）のほうは、地域で、配食サービスをやっていたりとか、勉強を見るのはできないが、食事なら手伝うという方が10人ほど集まって、関係機関ともうまくやっていく。行政や社会福祉協議会の助成なども受けてやっている。根郷地区には、社会福祉法人愛光があるが、助成をいただいて、こども食堂をやるには、お金がかかるが、地域ぐるみで、愛光も地域貢献ということで、何かやりたい、また、地区社協もやりたい、私たちもやりたい、では一緒にということで、長く続けていることで、広がりというのは見えてくると思う。できる人ができるときに少しずつやって、広げていくというのが大事かなと思う。

民生委員においては、8地区あるので、お互いが情報交換できるようにして、みんなが活動を知り合って、これならうちもできるということで、佐倉市全体に広まっていければいいなと思っている。

この地域福祉計画も、いろいろな団体の方が入っているので、いろいろな意見を出し合って、いい計画になればと思っている。これからの地域福祉にたくさんのヒントをいただいたかなと思っている。ご意見ありがとうございました。

7. 閉 会